

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	戦争が描く『コーカサスのとりこ』：日露戦争期の日本におけるトルストイ受容の一面
Author(s)	溝渕，園子； Mizobuchi, Sonoko
Citation	Acculturation dans les epoques d'internationalisation / 国際化時代の異文化受容：107-119
Issue date	2007
Type	Conference Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/3209">http://hdl.handle.net/2298/3209</a>
Right	

# 戦争が描く『コーカサスのとりこ』 日露戦争期の日本におけるトルストイ受容の一面

溝淵 園子

## はじめに

レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ『コーカサスのとりこ』(Lev Nikolaevich Tolstoi, “Kavkazskii plennik”, 1872)は、クリミア戦争に将校として参加した作者自身の経験をもとに書かれた児童向けの短編小説として知られる。これは、カフカース(コーカサス)で軍務についていた若者が、母親の待つ国元に帰る途中で山岳民(タタール人)に捕らえられ、しばらく捕虜生活を送るものの、時機を得て逃げ出し命からがらロシア軍の要塞に帰還するという物語である。そこには、戦争と人間、集団と個、異文化との接触といった問題がはらまれている。

これまで、『コーカサスのとりこ』は、主に次の四つの文脈で読まれてきたといえよう。それは、第一にトルストイの作家活動の文脈において、第二にトルストイの児童文学の文脈において、第三にトルストイの戦争小説の文脈において、第四にロシア文学史の「コーカサスもの」の文脈において、である。

第一の文脈と第二の文脈は密接な関係を持っている。それらは、この小説の執筆と平行して、当時44歳のトルストイが、領地ヤースナヤ・ポリャーナの邸内に農民師弟のための学校を開き、妻や子どもたちと教鞭を執り、『初等教科読本』(第一・二編)を完成させていたという伝記的要素に着目し、そこにトルストイの教育思想を導入しつつ、この小説をどう位置づけるかといった視点から読み解いていくものである。

また、第三の文脈も、『コサック』(“Kazak”, 1863)や『セヴァストーポリ物語』(“Sevastopol'skie rasskazy”, 1856-57)といったトルストイのクリミア戦争体験に素材が求められる小説群にこの小説を並べて解釈するという点で、トルストイの伝記的要素と関わるものである。だが、むしろここでは戦争とトルストイの平和主義といったテーマ性に重心が置かれているところに、一つの特徴が認められる。

さらに、第四の文脈については、19世紀前半のロシア・ロマン主義文学から継承されるカフカース表象の問題が前景化する。プーシキン『コーカサスの虜』やレルモントフ『現代の英雄』など多くの詩や小説に見られる「美、神秘、そして冒険」<sup>1</sup>の隠喩としてのカフカース、19世紀の作家たちのインスピレーションの源泉であった<異国情緒>としてのカフカースは、「コーカサス神話の一つの型(主人公が病める「ロシア」を捨てて自然・素朴な「コーカサス」に赴くが、最終的には後者に受け入れられずに帰還する)」<sup>2</sup>を形成しながら、ロシア文学の異文化表象の代表格として命脈を保ってきた。また、こうしたロマン主義文学におけるコーカサスの問題は、18世紀後半から19世紀にかけて進行したロシア帝国によるコーカサス併合の過程と絡み合っており、まさにロシアの帝国主義との相関関係においてイメージが形成されていった<sup>3</sup>。このような「異国の地」で個人的な救済を

追い求めるといったロマン主義的カフカース神話の系譜とは流れを異にするのが、トルストイの『コサック』や『コーカサスのとりこ』などカフカースものであるとする立場もある<sup>4</sup>。

だが、上述したいずれの文脈で見るにせよ、『コーカサスのとりこ』の解釈の多くに共通するのが、戦争という題材に注目し、この小説にトルストイの平和主義思想を何らかの形で読み取るという点であると考えられる。たとえば、この小説を原案として、舞台を現代のチェチェン紛争に置き換えて映画化されたS・ボドロフ監督『コーカサスの虜』(Selgei Bodorov, "Kavkazskii plennik", 1996)からは、戦争の意味の問い直しや、停戦と衝突、和平と報復を繰り返す人間の愚かさという明白なメッセージが引き出される<sup>5</sup>。

この小説をめぐるこうした解釈は、日本においても、平和主義者としてのトルストイ像という形で引き継がれている。こうしたトルストイ像の形成に最も大きな影響力を持ったのは、日露戦争時に日本で新聞メディアを通じて紹介された、トルストイの「思い直せ(悔い改めよ)」("Bethink Thyself")という非戦思想に基づく日露戦争批判論であろう<sup>6</sup>。1904年(明治37年)6月27日付で「ロンドン・タイムズ」に掲載されたこの日露戦争批判論を、幸徳秋水・堺枯川が同年8月7日付で「平民新聞」(39号)に「トルストイ翁の日露戦争論」という見出しで、六面にわたり全文を訳載した。トルストイの非戦論は、プロテスタント系の平和主義者や、キリスト教系・唯物論系を含む社会主義者によって支持された。そして、それは、大正期にピークを迎える<トルストイ・ブーム>に至る流れの中で、「預言者」・「人類の師」・「人類の良心」等々の人道主義・平和主義を基調とするトルストイ像が定型化ないし権威化されていく過程で、強い示唆を与え続けた。

まさに、この時期に重なり合うようにして、『コーカサスのとりこ』が日本で初めて翻訳・発表されている。明治37年1月と5月の二度にわたり、それぞれ『捕虜士官』と『捕虜の逃走』というタイトルで、「軍事界」と「文芸倶楽部」に掲載されたことには、同年勃発した日露戦争が大きく関わっていると見なせよう。日本において、トルストイの平和主義思想が紹介される流れと、『コーカサスのとりこ』の初訳が現れる流れが、同時に起こっていたという現象は興味深い。

では、トルストイの小説や評論、その思想がすでに紹介されある程度の蓄積もあったこの当時、『コーカサスのとりこ』はどのような小説として受容されたのだろうか。そこでなされた解釈は、上述の四つの文脈と関連づけられるものだったのだろうか。初訳の掲載誌が「軍事界」という陸軍系雑誌であったことから推測されるように、そこには従来論じられてきた日本におけるトルストイ像の構成要素とは異なる要素が浮かび上がってくるのである<sup>7</sup>。

本稿では、この『コーカサスのとりこ』が、日露戦争期の日本において、どのような作品として翻訳されたのかを検証する。その目的は、従来のトルストイ受容史ですでに明らかにされている平和主義者トルストイ像の系譜とは異なる一面に光をあてることである。

まず、明治期の日本におけるトルストイ受容経路の概要を、先行研究に照らして確認す

る。そうしたトルストイ受容史をふまえた上で、『コーカサスのとりこ』が初期翻訳においてどのように捉えられていたのかを、媒体となった掲載誌の特徴を通して把握する。次に、初期翻訳を原文と対比させ、相違点を指摘することにより、『コーカサスのとりこ』が明治期の翻訳当初、どのような文脈におかれていたのかを論じる。最後に、これらの考察を通して、戦争との関わりからトルストイ受容史のさらなる一面の可能性を確認したい。

## 1. 戦争小説としての『コーカサスのとりこ』

ここでは、『コーカサスのとりこ』がどういった雑誌に翻訳掲載されたのか、またどのようなタイトルに翻訳されたのかに着目し、日本におけるトルストイ受容史の観点からその特徴を洗い出す。

まず、明治期のトルストイ受容の経緯については、柳富子が「(一)プロテスタント系、(二)キリスト教社会主義者、唯物論的社会主義者を含む社会主義者系、(三)ニコライ神学校系、(四)文学者たちによる受容」<sup>8</sup>の四つの系列に整理している。明治19(1866)年、トルストイ『戦争と平和』の森体による抄訳『泣花怨柳 北欧血戦余塵』が、ロシア語からの直接訳で発表され、これが日本におけるトルストイ紹介の嚆矢となった。だが、ロシア語翻訳者が日本のトルストイ紹介で一つの流れを形成するのは、明治末期のことであり、それは主に大正期の受容史に関わる部分である。『コーカサスのとりこ』が翻訳発表される明治37年までのトルストイ紹介の経路としては、柳の整理に従えば、「(一)プロテスタント系、(二)キリスト教社会主義者、唯物論的社会主義者を含む社会主義者系」が主流を成していた。「(一)プロテスタント系」の紹介者として重要な役割を果たしたのが、徳富蘇峰主催の「国民之友」であったとの見方がすでに定着している。

だが、『コーカサスのとりこ』の受容経路を辿ると、それらとは異なる経路が見出される。この翻訳の最初の掲載雑誌は、陸軍系の「軍事界」であり、また「軍事界」を発行していた金港社とライバル関係にあった博文館の文芸雑誌「文芸倶楽部」がそれに続いている。すでに、トルストイの小説や評論については、明治36年までにすでに約40篇の翻訳が発表されているが、本稿執筆者が確認した限りでは、これら両雑誌でトルストイ作品が取り上げられるのはこの時が初めてである<sup>9</sup>。さらに、明治37年に入ると、にわかにロシア文学作品の紹介が活発になり、トルストイ作品はもとより、トルストイ以外のロシア作家の作品についても、プーシキン『ポルタワの激戦』(昇曙夢訳「読売新聞」2月17日)やレールモントフ『ボロディノの激戦』(昇曙夢訳「読売新聞」5月8日)、トルストイ『セヴァストオポルの落城』(原題『セヴァストーポリ物語』嵯峨の屋お室訳、春陽堂、7月)、ツルゲーネフ『軍事小説/間諜』(原題『ユダヤ人』橋本青雨訳、「毎日新聞」8月1日~連載)といった、戦争を主題にした小説が多く翻訳紹介されるようになる。そうした中で、『コーカサスのとりこ』が『捕虜士官』『捕虜の逃走』として発表されたことを考えれば、こうした日露戦争と戦争小説の翻訳という文脈でこの小説の翻訳の必然性をとらえることができ、軍事的な世相を背景に従来の受容経路とは異なる道が用意されたと理解できる。

また、先述したとおり、この小説は元々児童向けに書かれたものである。そのことと、明治期のトルストイの児童向け作品の翻訳出版史はどのような関係にあるのか。丸尾美保によれば、トルストイの児童向け作品の内容・形態から大きく次の三期に分けて考えられるという。「第一期は一九〇〇年までの時期で、このころ発行が始まった児童向けの雑誌や、家庭婦人向けの雑誌の中に児童に語る短い話として」数頁ずつ登場し、「第二期は一九〇一年から日露戦争(一九〇四年)にいたる時期」で「この時期には集中してトルストイの民話を取り上げられ」、「第三期は日露戦争後明治末にいたる時代で、本格的にトルストイの作品集が家庭向けに出版された」<sup>10</sup>。この整理に基づいて『コーカサスのとりこ』を考えると、第二期にあたるが、この小説の翻訳はそこにもあてはまりにくい主題と改変が見られる。トルストイの『イワンのばか』は、日露戦争中の明治 38 年に『最後の勝利』(沖野岩三郎訳)として翻訳出版されている。登場人物や風物を子どもにわかりやすいよう日本化するなど工夫が見られるが<sup>11</sup>、大筋ではトルストイの非戦思想が残されている。だが、『捕虜士官』や『捕虜の逃走』からはそうした思想は浮かび上がってこない。『コーカサスのとりこ』は、掲載誌の傾向も児童向け作品のそれとは異なり、また内容も後述のように軍国主義を肯定ないし支援するようなものとなっている。『コーカサスのとりこ』が児童向け作品として出版されるのは、大正 13 年 11 月の『四つの話：トルストイ物語』(田尾一一訳、児童図書館叢書 31、イデア書院)まで待たねばならない。このように、トルストイの児童文学作品の翻訳史の大きな流れに、この小説の初期翻訳は収めにくい位置にある。

さらに、初期翻訳のタイトルに着目すれば、この小説が戦争に力点を置いて価値付けされていることがわかる。『コーカサスのとりこ』の日本での最初の翻訳タイトルは『捕虜士官』となっており、同年に発表された第二の翻訳は『捕虜の逃走』という標題が与えられている。明治 40 年発表の第三の翻訳以降、「高架索の囚人」「コーカサスの捕虜」「高架索の捕虜」「高架索の俘虜」「カフカスの囚人」「コーカサスのとりこ」「カフカスのとりこ」というように、いくつかのバリエーションを経ながら、昭和 31 年以降はおおむね「コーカサスのとりこ」にまとめられた。明治 40 年以降の翻訳タイトルが、それ以前に発表された二つの翻訳タイトルと大きく異なる点は、コーカサス(カフカス)という地名の有無である。つまり、明治 37 年に発表された翻訳タイトルでは、それがどの土地で起こった出来事かというよりも、むしろ「捕虜」の話であることの方に力点が置かれていると理解される。ここには、帝国主義や民族紛争の問題と複雑に絡み合うロシアにおけるカフカス表象の問題は浮上してこない。日露戦争が描き出す『コーカサスのとりこ』では、それが戦争を舞台としている点や、敵陣に囚われた士官をめぐる状況を主題としている点に意味が持たされていると考えられる。

以上より、『コーカサスのとりこ』は、トルストイ受容史の面からいってもいささか特異な経路を辿っており、また日本での初めての翻訳発表当時、青年層以上の成人向けの戦争小説と位置づけられ児童文学翻訳史からずれた位置にあったことがわかる。

## 2. 初期翻訳に見る二つの特徴

では、ほぼ時期を同じくして、日本で翻訳・発表されたこれら二つの初期翻訳がどのような特徴を持っているのか、原文<sup>12</sup>を手がかりに検証する。

### (1) 敵国情報源としての『コーカサスのとりこ』 『捕虜士官』

岡田況後抄訳『捕虜士官』（「軍事界」、明治37年1月3月）の本文は、登場人物やその会話、筋の展開をめぐっては、原文からの改変や歪みがさほど生じていない。だが、明らかな相違は、要塞の説明がなされていること、地形の様子に脚色があること、また流血の場面にやや誇張があることである。

たとえば、小説の冒頭部分で、原文には「コーカサスに、ひとりの貴族が将校として勤務していた。彼は名をジーリンと呼ばれていた」（168頁）とあるが、岡田訳では「余程以前の事露西亞のカフカーズに一つ大きな城塞があつたが。其の城に勤めて居た陸軍士官の一人で、ジリンと云ふ人があつた」（一一九頁）というように、「カフカーズ」に「大きな城塞」があるという情報が付加され、また貴族の将校が「陸軍士官」に変更されている。ロシア軍の要塞の一つがコーカサスにあるということは、当時の日本の読者にとっては、敵国の軍事に関する新たな情報として供給される。一方、ジーリンの設定については、この雑誌が陸軍関連雑誌であったことによるものと推察される。

また、コーカサスの地形に関しても微細に描かれている。原文と初期翻訳をそれぞれ以下に引用し比較する。

コーカサスには、当時戦争があった。道という道は、昼でも夜でも、通行が困難だった。馬車にしる徒歩にしる、ロシア人がひと足要塞を離れると、たちまちダットン人に殺されるか、山の中へつれて行かれるかするのだった。そのため、週に二回護送兵が要塞と要塞のあいだを連絡し、人民は、兵隊に前後をまもられて、旅をすることになっていた。

[168頁]

丁度此の頃このカフカーズといふ所に露西亞人と韃靼人との永い戦が有つたので。此のカフカーズから方々の他の地方へ行く道路などは夜でも昼でも人っ子一人通るものもない。若し露西亞人の誰かが一歩でも城塞の外へ出ようものなら、それこそ直ぐと韃靼人が遣つて来て、殺すか、左もなくば自分らの山寨へ連れて往つて了うと言ふ様な仕末なので露西亞の方では若しそこから離れてゐる他の城塞へでも是非行かねばならぬ様な用事が出来た時には、一週間に二度宛態々大勢の護衛兵を出して、その中央の所を普通の人民が通つて行く様にした。勿論韃靼人等は今の台湾の土匪の様にぼつぼつ一人歩きの旅人なんかを脅かすのであるから、此方から大勢の兵士などが行くと最う寄り

さへも仕ないのである。

[一二〇頁] (下線は本稿執筆者による)

これらの引用を比較すれば、原文にはただ「護送兵」とあるところが、岡田訳では「大勢の護衛兵」というように、ロシア軍兵士の数の多さが情報として付加されていることがわかる。だが、ここでより重要なのは、原文には存在しない文が添加されている点である。「鞭鞭人」の形容を「台湾の土匪」のそれへとずらすことによって、場面は日本と台湾の問題にすり替わる。また、ここで働いている論理は、「大勢の兵士などが行くと最う寄付きさへも仕ない」とあるように、兵士が「大勢」であれば向かうところ敵無しという、いわば数で圧倒する論理である。

さらに、ジーリンがダットン人に捕らえられる緊迫した場面で、乗っていた馬が銃で撃たれ「頭に穴があいて、そこから真っ黒な血がふきだしてあり あたり二尺四方ぐらい、砂ぼこりがべっとりぬれていた」(170頁)と原文にあるところが、岡田訳では「頭の所には鉄砲で撃たれた跡が大きな穴になつて、其の中からは真黒い血が泉のように流れ出して、辺はまるで血の海の様」(一二四頁)とやや誇張した表現に変わっている。負傷したダットン人に連行されるジーリンが、「目は血で張りついている」(170頁)ため周囲が見えないと原文にあるが、岡田訳では「両眼は流れる血潮で一杯になり」(一二四頁)見えないというように、流血の量が強調されている。原文は乾燥した土地柄と時間の経過を表現しているのに対し、岡田訳は流血の惨事に書き換えられていることがわかる。

岡田訳『捕虜士官』は、主に陸軍兵を読者とする雑誌に掲載されていることからもわかるように、ロシアの小説を読むことにより、戦争間近に控えた敵国ロシア軍の内情や戦闘方法に関する情報を収集できる仕組みになっている。そのことは、「軍事界」掲載号の目次を見ればより明らかである。「軍事界」第二年第二十四号(明治37年1月1日発行)の目次には、「軍人としての修養法」といった学芸雑纂のほか、「コサック騎兵」の絵葉書、「新年に於けるアムウル州知事官舎の仮装会」や「西比利亚風俗」の写真、「トルストイ翁」のコマ写真、「日露協約如何」「満州の秩序紊乱」といった内外近事、各国軍の戦術の研究や各国の地理風俗の紹介と並んで、小説雑俎という形でこの小説が掲載されている。ロシアと国交断絶した2月発行の「軍事界」第二年二十六号では、日本軍人やロシアのアムウル州知事の写真、「予の露西亜観」(島田三郎)や「露独と日本」(大岡育造)といった時論、「日露危局の端緒」や「露国の回答と日本の戦備」などの内外近事、「露土戦に於けるドン、コサック騎兵の働作」という学芸記事と並んで、この小説が連載されている。続く「軍事界」第二年第三十号(3月発行)では、複数のロシア軍艦の写真のほか、ウラジオストクなどの建造物を紹介するコマ写真、日露先方や日露戦争に関する時論や内外画報が種々掲載され、地理風俗の紹介ももっぱらロシアに関するものとなっている。こうした流れの中に、『コーカサスのとりこ』が日本で初めて翻訳・掲載されたことの意味を問えば、この小説の位置づけが軍事的な目的と不可分のものであったことは明白であろう。

そして、このような敵国ロシアの軍事的な情報供給の役割だけではなく、小説におけるロシア軍が都合に応じて日本軍の文脈に置き換えられ、そこに数の強さの論理が持ち込まれたり、やや誇張した流血の場面が時折差し挟まれたりすることにより、間接的に読者の士気を鼓舞する原動力にもなっていると考えられる。

## (2) 忠孝物語としての『コーカサスのとりこ』 『捕虜の逃走』

高階柳蔭訳『捕虜の逃走』（「文芸倶楽部」第十巻第七号、明治37年5月1日発行）は、戦時下の文芸雑誌での掲載であるためか、岡田訳とはまた異なる翻訳となっている。「文芸倶楽部」は明治28年、それまで発行していた「明治文庫」「春夏秋冬」「世界文庫」「逸話文庫」「文芸共進会」等の雑誌、叢書を統合して発刊され、大正元年に廃刊されるまで、当時の一般読者の絶大な支持を受けた代表的な文芸雑誌である。『捕虜の逃走』掲載号は、時局を反映したものとなっており、この小説と並んで、「非非国民」（本山袖頭巾）「戦死の花」（河田烏城）「勇士の妹」（田村西男）といった懸賞戦争小説のほか、「日露軍談」（森林黒猿）といった講談や、戦局を知らせる時報が掲載されている<sup>13</sup>。

そうした流れの中で、『捕虜の逃走』は、主人公ジーリンの名にまさに「士倫」という漢字が当てられていることに象徴されるがごとく、忠孝物語の性格を帯びたものへと変えられている。

たとえば、ジーリンがダットン人の捕虜になる出来事の発端となるジーリンの母からの手紙が、原文では第二段落に現れるが、高階訳では小説の冒頭にその配置を変えられている。手紙の内容も大きく脚色が施されている。原文では、以下のような簡潔な内容となっている。

『わたしはもう年をとったので、死ぬ前にかわいいわが子をひと目見たいと思います。一度帰ってきて、わたしとお別れをし、葬式をすませたうえで、また勤めに出るなり、どうしても好きなようにしておくれ。わたしはおまえにおよめさんをひとり見つけておいた。利口な、美しいむすめで、領地も持っています。気に入ったら結婚して、そのままうちに残ってもよいではないか。』

[168頁]（下線は本稿執筆者による）

それに対し、高階訳では、原文に改変が施されている。

おひおひと寄る年波の数そひけるにや、近頃はいたく身体もよわり最早命のほどもながらざらば候まゝ、暫時休暇をねがひ一度古郷へかへり久々にて壮健なる様子をお見せなされたく候、君のため國のため身を軍籍におき候吾兒にかやうな事を申し候は未練がましく候へども、これも親心とよろしくお察しなされたく候。二つにはそなたも何時まで獨身にてあるべくもあらねば、かねて良き嫁もあらばと心がけをり候ところ、



容姿といひ心ざまさへ申分なき娘見あたり申し候。これならばかららずそなたの氣にも入るべくと存じ候まゝ貰ひうけなされ候ひては如何にや、その儀も篤と相談いたしたく候につき、それこれかねて是非とも一応御帰郷なされ度、かならずかならずかならず待ち入り申候、かしこ。 母より 士倫どの

[八四頁] (下線は本稿執筆者による)

高階訳では、原文にはない「君のため国のため身を軍籍におき候吾児にかやうな事を申し候は未練がましく候へども、これも親心とよろしくお察しなされたく候」という文が加えられており、忠君愛国を優先させるべきところ親心で申し訳ないが願いを聞き届けてほしいという、老い先短い母親の情を切々と綴る文面に変えられている。それが冒頭に置かれることで、母子の情愛が捕虜事件に底流していることがほのめかされる。また、原文の花嫁候補者が「領地を持っている」という部分は削除され、よかったら「そのまま家に残ってもよいではないか」という部分は「一応」帰郷してほしいのでかならず待っているとといった内容に変更されている。こうした改変は、ジーリンの帰郷の理由付けに苦慮した結果であると考えられる。原文にはない一節を加えることにより、忠君愛国が何より優先されるべきものであることを明言しつつも、親孝行の道も同時に説くことになり、忠孝の整合性が担保されている。

このほか、高柳訳には改変箇所が多く見られるが、そのうち際立ったものには次の二箇所が挙げられよう。

まず、結末部で、捕虜だったジーリンが命からがら要塞に逃げ戻り同僚たちに語った言葉を、以下に原文、高階訳の順に引用する。

「これがぼくの帰省と結婚さ！いや、どうもそのほうはぼくの運命ではないらしい」  
こうして、彼はコーカサスの勤務に残った。

[190 頁]

『僕は一体妻なんか持つ所存で故郷へ帰らうとしたばかりで、こんな目にあつたのだ。婚禮どころかもう少しで殺されるところであつた。して見ると僕には到底妻を持たぬべく運命が定まつてゐるんだ。好し僕はもう決して持とうとは思はぬ。』

と云つた。

士倫はその後相変わらず連隊にゐて当分帰郷の念を絶つた。

[一二六頁]

このように、原文では捕虜になり復隊した顛末を冗談めかしてジーリンに語らせ、勤務に残ったとだけ簡潔に述べられているのだが、一方の高階訳では、士倫の話の焦点が「妻帯」に絞られ、一時の気の迷いが命にかかわる危険につながると警鐘を鳴らしているかの

ような内容にすり変わっている。そして、「帰郷の念を絶つ」といった、個人的な願望を捨て任務に戻る、「あるべき」軍人の姿が映し出されるのである。

次に、高階訳では、前掲の手紙文の後、まったく原文にはない創作エピソードが挿入されており、その部分を以下に引用する。

士倫は可薩克騎兵連隊附の士官である。先年士官学校を出で直ちに抜擢せられて、かの有名なる可薩克騎兵隊附を命ぜられ、胡沙吹く辺境の要塞に職を奉ずるここに三年、身は少壯の鋭気に任せて屢屢敵地の偵察に危険を犯してその武勇をあらはし、心は軍人の快活をもととして誠意を以て人々に交りたれば上官の気受けも至つてよく、部下はなほさら士倫を親とも兄とも思つてゐるのである。

近きころ中尉に昇進したので、この少壯士官が嘗て在校中毎夜消灯喇叭が鳴つてから、木製の寝台に窮屈なる毛布の中に夢見た未来の栄達のその一階段を上つたのである。

[八四 八五頁]

ここからわかるのは、士倫が武勇を持ち軍人に適した誠意ある人物で、上官にも気に入られ部下にも慕われるたいそうな好人物であり、今や出世の道を歩んでいる有望株であるということである。そこには、原文にあるような「もしおよめさんがきれいだったら結婚したってかまわない」(168頁)というジーリンの片鱗すらない。このような人物であるからこそ特別に帰郷が許されたというように、帰郷の条件が丁寧に描きこまれている点は、あっさり賜暇を受けた原文と大きく異なる部分である。そこにあるのは、国家に忠誠を誓い、軍務を忠実にしようとする軍人の道である。

ここで見てきたように、高階訳では、『コーカサスのとりこ』はある青年士官の忠孝物語に変奏されている。国家、天皇、親への忠孝という問題に対する、きわめて当時の日本的な文脈を持つ一つのモデルとして、この『捕虜の逃走』が提示されたと考えられる。

以上、二つの初期翻訳を検討し、原文との違いを指摘することにより、この『コーカサスのとりこ』という小説が担っていた読み物としての期待は次のようなことであるとわかった。一つは敵国ロシアの軍事・地勢に関わる情報源、もう一つは日本の兵士たちの士気を鼓舞する忠孝の精神のモデル、であるという二面性を有していることだ。前者ではあくまで翻訳者や編集者、読者のまなざしは敵対関係にある異文化ロシアという客体に向けられるものと規定できるが、後者は、ロシア兵があたかも日本兵であるかのように変換されており、日本兵士としてのモデルがそこに求められているというところで捻じれた現象が起きている。その意味で、『コーカサスのとりこ』は翻訳紹介当初、実際には、ロシアの小説を装った日本の戦争小説と化していたとも見なすことができよう。

## おわりに

以上、トルストイ『コーカサスのとりこ』を、日本のトルストイ受容史やトルストイ児童文学受容史を視野に入れつつ、原文と二つの初期翻訳を比較することにより、その特徴を見てきた。これまでの考察を通してわかったことは、次の三点である。

第一に、この小説は、日露戦争の開戦を契機に翻訳発表されており、初期翻訳当初は、児童文学作品ではなく、まさに青年層以上の成人向けの戦争小説としての位置づけがなされていたということである。第二に、戦争というファクターにより、この小説は当時の読者に対して敵国ロシアの軍事・地勢に関する情報を供給する期待が担わされていたということである。第三に、初期翻訳を見る限りにおいて、それは、ロシアの小説に仮装した、日本の軍国精神の規範を示す戦争小説であったということである。この第三の特徴に着目すると、当時の日本にとって、『コーカサスのとりこ』の初期翻訳とは、単なる<他者>ではなく<自己>の一部をも構成する両義的な対象であったと理解することもできよう。こうした『コーカサスのとりこ』そのものを初期翻訳に着目し日本におけるトルストイ受容史と関連づけて考察した研究は、現在のところ、管見では見当たらない。

だが、この小説は、その3年後、中島孤島訳「高架索の囚人」(「新小説」、明治40年2月)として改めて翻訳発表されており、この翻訳は原文に大きな変化が施されておらず、それ以降こうした翻訳が重ねられ、大正13年以後は平和主義に基づいた児童文学として明確な位置が与えられることになる。無論、こうした『コーカサスのとりこ』の受容史を見れば、それは『イワンのばか』がそうであったように、日露戦争時に限定される現象だったと結論づけられるかもしれない。ただ、この初期翻訳に関する考察において興味深いのは、すでに明治26年、および明治34年から45年にかけて、トルストイの作品が毎年約八編ずつ翻訳されるというトルストイ文学の翻訳が活況を呈した中であって<sup>14</sup>、平和主義者としてのトルストイ像が形成されつつある流れに平行して<sup>15</sup>、こうしたトルストイの小説が軍事的な文脈に回収されていく流れが起きていたことである。明治37年8月に「思い直せ(悔い改めよ)」(“Bethink Thyself”)という非戦思想に基づく日露戦争批判論が翻訳発表される動きと、『コーカサスのとりこ』を戦争に活用しようとする現象が同時進行的にあらわれた。このことは、従来の日本におけるトルストイ文学受容史にもう一面の可能性を照らし出してくれると同時に、日露戦争時のロシア文学作品の捉え方にある種の混乱が生じていた様子を伝えてくれる。

なお、本稿での議論は、あくまで『コーカサスのとりこ』をめぐる日露戦争時の解釈を、イメージを媒介する掲載誌の特徴と翻訳文の特色から導き出すという、限定的なものである。こうした『コーカサスのとりこ』についての解釈が、非戦論等に代表される平和主義者としてのトルストイ像の文脈に、その後どのように折り合いをつけながら回収されていたのか、トルストイ受容史の観点からのより詳細な考察も必要であろう。『コーカサスのとりこ』が戦争を題材とする児童文学史とどう関連づけられるのかという展望も残されている。さらに、『コーカサスのとりこ』の初訳と同年に、加島汀月訳『カフカズの囚は

れ人』(レールモントフ原作)が「文芸界」に発表されており、日露戦争時に同系統の小説が翻訳されていった文脈をより精査する必要がある。それらは、今後の研究課題としたい。

## 註

- (1) Sahni, Kalpana, *Crucifying the Orient: Russian Orientalism and the Colonization of Caucasus and Central Asia*, Bangkok, White Orchid Press, 1997 (カルパナ・サーヘニー(松井秀和訳)『ロシアのオリエンタリズム 民族迫害の思想と歴史』東京、柏書房、2000年、57頁)。
- (2) 中村唯史「線としての境界 現代ロシアのコーカサス表象」『山形大学紀要』14-4、2001年、150(159)頁。
- (3) Susan Layton, *Russian Literature and Empire: Conquest of the Caucasus from Pushkin to Tolstoy*, Cambridge, Cambridge University Press, 1994. レイトンは、19世紀のロシア文学におけるコーカサス表象を詳細に考察したこの著作の中で、こうしたロシア文学とロシア帝国主義の関係を「共犯関係」と呼び、19世紀の文学こそがカフカースに対してロシア人が抱いているイメージが形成される上で決定的な役割を果たしたと述べ、その系譜と特性を明らかにしている。また、特に、19世紀前半の作家・詩人が、西欧の前ロマン主義・ロマン主義から獲得した概念をカフカース諸民族に適用した結果として、後者が「高貴なる野蛮人」(noble savage)として表象されるようになったことも指摘している。
- (4) サーヘニー、前掲書、95頁。
- (5) この映画の製作時期にあたる1994年から1996年にかけて、コーカサスの状況の不安定化、ロシア軍の第一次チェチェン侵攻など、同時期の状況と連動するようにして、時事的な新聞雑誌ばかりでなく、文芸誌でも、コーカサスを主題とする論文・回想・ルポルタージュ・小説の数が増大したことが指摘されている。(中村、前掲論文、141(168)頁)また、19世紀においても、ロマン主義以降、シャミーリを指導者とする山岳民の抵抗は続いており、カフカース情勢は国民之関心事であったことに加え、1859年にシャミーリが投降しペテルブルグへ護送されると一大センセーションを巻き起こすが、その1860・70年代には、大量の歴史書や紀行、従軍記、その他カフカースの諸々に関する著作が出版された(Thomas M. Barrett, "The Remarkings of the Lion of Dagestan: Shamil in Captivity", *The Russian Review*, 53-3, 1994, p.366)。このように、とりわけ19世紀以降のロシアにおいて、カフカースと戦争は強い結びつきを持つものとして捉えられるようになった。
- (6) 柳富子は、明治期のトルストイ受容史を概観する中で「ひときわ精彩を放つ部分は、なんといっても、この作家の非戦論をめぐる局面であろう」(柳富子『トルストイと日本』東京、早稲田大学出版部、1998年、21頁)と述べている。

- (7) 丸尾美保は、トルストイの非戦思想が盛り込まれている『イワンのばか』が日露戦争下の日本で『最後の勝利』と題し翻訳出版されたことに着目し、この作品が当時どのように解釈されたのかを検証している。「日露戦争下に出版された「イワンのばか」  
沖野岩三郎『最後の勝利』考」『梅花女子大学大学院児童文学会』12、2004年、108-125頁。
- (8) 柳富子、前掲書、10頁。
- (9) 「明治期ロシア文学翻訳年表稿」(川戸道昭、榊原貴教編『ゴーゴリ集』明治翻訳文学全集新聞雑誌編37、東京、大空社・ナダ出版センター、2000年、341-370頁)を参照。
- (10) 丸尾美保「明治の児童向け出版におけるトルストイ受容」川戸道昭、榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧』6(スペイン・ロシア編)、東京、大空社・ナダ出版センター、2005年、643頁。
- (11) 同上、657頁。
- (12) 初期翻訳文の引用は、原典に拠る。引用頁は漢数字で示す。なお、引用にあたり、旧漢字は新漢字に改めている。原文は、L. N. Tolstoi, *Kavkazskiy plennik*, Kharbin: izdanie soyuza uchitelei k. v. zh. D., 1921 を、翻訳は中村白葉訳『民話と少年物語』トルストイ全集13、東京、河出書房新社、1973年を参照した。本稿の引用はこの翻訳に拠る。引用頁は引用後に算用数字で示す。
- (13) なお、掲載号の前号である「文芸倶楽部」第十巻、第六号(明治37年4月発行)の巻末に次号の予告紙面があり、それと見開きで「少年世界定期増刊 露西亜征伐」の広告も併載されている。そこには「戦時に於ける少年諸君の好読物として、露西亜征伐を発行す、記する処戦争実記あり、戦争小説あり、戦争芝居あり、軍歌あり、加ふるに少年諸君が満腔の熱誠を披露せし征露短文あり、本文の妙、挿画の麗、皆本誌特有の技術を發揮し以て軍国少年の机辺に致す、乞ふ発刊の日を刮目して待て!!」という宣伝文句があり、記事要目として「大勝利」「敵前上陸」といった口絵のほか巖谷小波『桜太郎』や大町桂月『日露名将伝』、竹貫直人『日露戦話』など戦時色の濃い少年向け小説の掲載予告が見られる。ここからも、『コーカサスのとりこ』の初期翻訳がこうした軍事的文脈におかれていたことは類推できよう。
- (14) 前掲「明治期ロシア文学翻訳年表稿」を参照。
- (15) 明治25年に北村透谷は、戦争を素材とした作品『コサック』や児童文学作品『イワンのばか』を読み、すでにトルストイの平和主義を指摘している。「伯の著書「コサック」を読み、「イバン・ゼ・フル」を読みたらん人は必ず、伯が戦争に対する悪感情を認むるなるべし。「イバン」の中に其主人公なるイバンの口を仮りて言はしむるところを見るに、イバンは兵卒を以て無用なるものと認め、敵ありて来り犯すに及びては満面の愛笑と懇情とを以て出でて彼を迎へ、遂に彼をして帰服せしめたる有様を叙するが如き、伯が平和主義の本領を推知するに余りあり。其他の諸著を讀みて

も、伯の精神は人間の靈魂を改造するを以て、大主眼となすにある事を知るべし」(北村透谷「トルストイ伯」法橋和彦編『トルストイ研究』トルストイ全集別巻、東京、河出書房新社、1978年、344頁。初出は「平和」第2号、1892(明治25)年5月18日)。

(熊本大学文学部)